

プラーナーヤマとクンダリーニーヨーガ シュリ ークラ派における儀礼解釈の二つの位相

著者	井田 克征
雑誌名	論集
巻	30
発行年	2003-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129796

プラーナーヤーマとクンダリニーヨーガ

——シュリークラ派における儀礼解釈の二つの位相

井 田 克 征

0. 序 論

Brunner [1992] は、シヴァ派のアーガマ文献を参照して、そこで示される理論と実践とがしばしば整合性を欠いているという事実を示している。それらのテキストでは、神学理論から実体的な儀礼体系が導き出され、また儀礼の中にそうした理論が表現されるといったような両者の統一性は時に不完全なままに留まっている。そしてそうした場合には理論よりも儀礼の方に重点がおかれがちとなっている。彼女は以上の事実を、タントラ儀礼が多様な実践の複合体であるということ、そしてそうした儀礼を保持する系譜がさらに他の系譜の理論や新しい実践などを取り込みつつ、自分達の保持する文献を補完・改編してきたことなどの理由から説明している。

しかしこうした理論と実践との齟齬は、本稿で扱うシュリークラ派においては、それほど目立たない。それはこの系譜が、最高女神を中心とした世界観を中核に据えて、自らの体系の整合化を強力に推し進めてきた結果である。つまりこの派の思想家達は、解脱すなわち最高原理たる女神への帰滅を至上命題とした同派の神学理論を基本的な枠組みとして用いることで、様々な儀礼や実践を一つの体系の中に包括的に取り込んできたのである。こうした理論的立場は、例えばBhāskararāyaのような後代の著作家において典型的に見出される。彼らはこうした理論化を推し進めることで、極めて“純化”された教義体系を構築し、この派の隆盛を支えた。だが、理論的立場が実際の儀礼を再編成し、しばしばそれに変更を迫るものであったその一方で、神学理論よりはむしろ、実際に行なわれてきた儀礼の手順をそのままに記述するような立場もまた当然のことながら存在した。この実践的とでも呼ぶべき立場は、解脱志向を示す理論的

立場とは相反して、現世利益への志向性を示すことが多い。おそらくそれはタントラ儀礼の多くが、息災や増益、そして時には調伏などの現世利益を求めるものとして行なわれてきたということにも関係する¹⁾。

タントラ儀礼の記述に関するこの二つの立場は、シュリークラ派においてはそれぞれ内的儀礼 (antaryāga) および外的儀礼 (bahiryāga) と呼ばれる対概念に相当する。一般的には、この外的儀礼は実際に“外的”所作として行なわれる儀礼として、そして内的儀礼は心の内にてのみ行なわれる儀礼、つまり実際の儀礼の所作を観想することとして解される。この場合に、内的儀礼は単に儀礼を思い浮かべるだけではなく、その中に何らかの神学概念を読み込むことを含んでおり、それゆえ常にそれは外的儀礼の神学的解釈という性質を帯びている²⁾。このような精神活動は、つまるところ全ての外的儀礼を固有の文脈から切り離し、一様に解脱へ向かう内的実践として再解釈することに他ならない。多様な外観を持つ外的儀礼は、本質的に等価なものとして相互に結び付けられ、一義的な内的儀礼の体系の中に組み込まれる。こうして形成された、諸要素間に密接な対応性を与えられた緻密な儀礼体系は、シュリークラ派の特徴としてしばしば言及されるものである。

本稿は、こうしたシュリークラ派の儀礼における二つの水準の相互作用の典型的な例として、日常儀礼 (nityapūjā) の中で行なわれるプラーナーヤマを取り扱う。あるテキストにおいて外的儀礼として説かれるプラーナーヤマが、他の理論的著作においては内的儀礼として読み直される。その際にプラーナー

1) こうした現世利益を追求する典型的な例として、NSA 4 章に述べられる様々な成就法や、TR 29-31章のホーマ儀礼などが挙げられよう。後者については井田 [2003] p.14以下参照。

2) YHの第3章は外的儀礼にも触れている。例えば *anāmāṅguṣṭhayogena tarpayec cakradevañāḥ* / 「薬指と親指を結んで、チャクラの神格達にタルパナをなすべきである。(YH 3.190ab)」という記述を例にとるなら、この外的所作を伴う儀礼は、その解釈において薬指をシャクティ、親指をシヴァと理解することで、タルパナをその両者の合一、すなわち帰滅を意味するものとして説明する。こうした解脱論的読み替えは、このテキストのいたるところに見出される。

ヤーマは他の儀礼、つまりクンダリニーヨーガと重ね合わせられることで新しい意味を付与される。しかしこのような儀礼の再解釈のプロセスは、決して一方的なものでは有り得ない。理論が実践のあり方を規定すると同時に、実践がまた理論に関与してその変更を迫ることもあるのである。儀礼記述を巡る二つの水準の間のこうしたダイナミズムを示すことが本稿の目的である。

その際に主に参照するのは、シュリークラ派において重要視されている三つのテキストである。まずは外的儀礼を取り扱う *Nityaśoḍaśikārnava* (NŚA, 9世紀後半) と *Tantrarājatantra* (TR, 14-15世紀), そして内的儀礼を主題とする *Yoginīhrdaya* (YH, 13世紀後半) である³⁾。NŚAはシュリークラ派において現存する最古の聖典であり、プラーナヤーマをはじめとする一連の儀礼を、外的儀礼としての側面から述べている。そしてこのNŚAからかなり遅れて成立したYHは、カシュミールシヴァ派の影響を強く受けつつ、NŚAに示されたような外的儀礼を解脱論的に再解釈し、内的儀礼として高度に体系化している。そしてこれらのテキストの後を受け成立したTRは、YHなどの理論的著作の影響を大きく示しつつも、基本的にはNŚAと同様の外的儀礼に多くの枚数を割いている。こうした三つのテキストの性質の違いは、おそらくこの派の儀礼体系が単に外的から内的へと発展していったのではなくて、むしろそれら異なった儀礼記述が相補的に一連の儀礼のシステムを形成していたのだという事実を示しているだろう。

1. プラーナヤーマ

1.1. 概 観

プラーナヤーマとは呼吸を制御することであり、主に身体の浄化などを目的として行なわれる実践である。これは儀礼的文脈において、本儀礼の前に行なう清めや、贖罪のために行なわれるものとして後期ヴェーダ文献以降、広範

3) これらのテキストの詳細についてはGoudriaan [1981] pp. 59-67; 井田 [2003] p.14 参照。

に見出されるようになった⁴⁾。さらに *Yogasūtra* などの解脱を目指す実践体系の中でもまた、個人の身体浄化の手段としての位置を占めている。

TRの27章に、このプラナーヤーマの手順が述べられている。この箇所は八支ヨーガ⁵⁾に関する記述の一部分であり、本稿の主題である日常儀礼の中のプラナーヤーマとは文脈を異にするが、基本的な所作はほとんど変わらないのでここで参照しておこう。

vāmena nāsārandhreṇa pūrayed amṛtāmanā /
smarann ambu marut paścād dakṣiṇenāpasārayet // 67 //
evaṃ susādhite paścād dvātriṃśanmātrayāharet /
dhārayet tac catuḥṣaṣṭyā recayet tat turīyataḥ // 68 //

「左の鼻孔を通じて、[息を] 満たすべきである。甘露からなるものとして水 [の種子] を想起して⁶⁾、それから右 [の鼻孔] を通じて、息が吐き出されるべきである。このようによく訓練したなら、それから32マートラの間、吸うべきである。それ(息)を64 [マートラの間] 保持するべきである。それ(息)を四分の一(16マートラ)で吐くべ

4) Kane [1977] p.1436 ; Einoo [2002] 参照。

5) TR 27. 54以下参照。そこでは、yama, niyama, āsana, prāṇāyāma, pratyāhāra, dhāraṇa, dhyāna, samādhi という典型的な八支ヨーガが述べられている。

6) プラナーヤーマはしばしば粗大元素の種子マントラの瞑想を伴う。特に多く見られる例は風・水・火の三つの種子を用いるものである。

cakrarājaṃ samabhyarcya tataḥ sampūrṇavidyayā / yajet puratrayaṃ bhaṅgyā bijatrayasamanvitam //
śoṣadhāhāplavam kṛtvā vāyagnisailākṣaraṇi / prāṇāyāmatrayaṃ kuryāt smaran vidyāṃ hrīḍa punaḥ // (SU 17-18)

この種の瞑想はJA 2. 31cd-33 ; KA 15. 37-39など多くのテキストの中に見出される。これに対して五つの粗大元素の種子マントラを用いる例は *Devībhāgavatapurāṇa* 11. 8. 1-21に見出される。そしてこれらの種子マントラと粗大元素の対応関係は、以下のとおりである：地 (lam), 水 (vam), 火 (raṃ), 風 (yaṃ), 空 (haṃ)。本文のように水の種子のみの言及例は、シュリークラ派において他には見出すことができなかった。しかし *Yājñavalkyaśmṛti* 1. 23-24にはプラナーヤーマを行なった直後に水の神格のマントラを唱えることが述べられており、両者のつながりの古さを示唆している。

きである。(TR 27. 67-68)」

プラーナーヤーマは、身体内の脈管 (nāḍi) や体内を巡回する風の概念と密接に関係している⁷⁾。中でも重要なのは、スシュムナー・イダー・ピンガラーと呼ばれる三本の脈管である。中央の脈管スシュムナーは、肛門近くにあるムーラーダーラチャクラを始点として、背骨に沿って上へと伸びている。この管の先端は、頭頂部のブラフマランドラに達する。そしてイダーとピンガラーはそれぞれムーラーダーラを始点としてスシュムナーの左右を走り、イダーは左の鼻孔に、ピンガラーは右の鼻孔へと接続している。

こうした身体観に基づいて、プラーナーヤーマは以下の三つのプロセスからなるものとして理解される。1) プーラカ：左の鼻孔からイダー管へと息を吸う。2) クンパカ：その息を中央のスシュムナー管において保持する。3) レーチャカ：ピンガラー管を通じて右の鼻孔から息を吐く。この三つのステップには時間がそれぞれに規定されることも多いが、それはテキスト毎に大きく異なっている。TRではそれぞれ32, 64, 16マートラが割り当てられている。

そしてこの実践の程度に応じて、実践者には三つのしるしがあらわれるという。それは低い方から順に、1) 発汗、2) 振動、3) 浮遊である⁸⁾。

prāṇāyāmas tridhā prokṭā⁹⁾ uttamādhamamadhyamāḥ /

lāghavo bhūtalatyāga uttame cittanirvṛtiḥ // 64 //

sarvāṅge svedasamvṛddhir adhame madhyame tathā /

7) TRは主要な脈管として以下の14を挙げる：suṣumnā, alambuṣā, kuhū, viśvodarā, vāraṇā, hastijihvā, yaśasvinī, idā, piṅgalā, gāndhārī, puṣā, śaṅkhā, payasvinī, sarasvatī (TR 27. 25-40)。そして体内の風は以下の10を数える：prāṇa, apāna, samāna, udāna, vyāna, nāga, kūṛma, kṛkara, devadatta, dhanañjana (TR 27. 48)。これらに関してはGupta [1979] p.168も参照。

8) kramād abhyasataḥ punso dehe svedodgamo 'adhamah // madhyamah kampasamyukto bhūmityāgaḥ paro mataḥ / uttamasya guṇāvāptir yāvac chīlanam iṣyate // (ŚT 25. 21-22)

9) Avalonによる底本にはproktaとされている。

sarvāṅgakampanaṃ proktaṃ abhyāsāt kālasaṃyutāt // 65 //

「最高・最低・中位という三種のプラナーヤーマが言われる。実習の時間に応じて、最高の「プラナーヤーマの場合には「身体の」軽さ、地表から離れること、心の満足が生じる。低位の「プラナーヤーマの場合には、全身に汗をかく。中位の「プラナーヤーマの場合には、全ての肢体の振動が生じると言われる。(TR 27. 64-65)」

さらに多くのテキストにおいてプラナーヤーマは、マントラのジャパや瞑想 (dhyāna) を伴うかどうかに応じて、ジャパを伴うもの (sajapa)・ジャパを伴わないもの (ajapa)、あるいは瞑想を伴うもの・伴わないものという二つに区分されている。これらの記述において、ジャパを伴うものと瞑想を伴うものという語はほとんど同義で用いられ、この両者が常に随伴するものであることを示唆している。そしてこうした文脈では、ジャパを伴うものの方が伴わないものよりも優れているとされる¹⁰⁾。

1. 2. 日常儀礼におけるプラナーヤーマ

上で述べたようなプラナーヤーマは、実際のところ、この派に特有のものという訳ではなくて、インドにおいて極めて一般的な実践に過ぎない。この派の日常儀礼におけるプラナーヤーマの特殊性は、それが常にジャパ・瞑想を伴っていて、しかもそれらがこの派の神学的世界観を反映しているという点にある。

それではいよいよこの派の日常儀礼におけるプラナーヤーマに話を進めよう。日常儀礼とは、一日三度行なわれる最高女神トリプラスンダリーの供養で

10) japadhyānaṃ vināgarbhaḥ sagarbhaḥ tadviparyayāt / agarbhād garbhasaṃyuktaḥ prāṇāyāmaḥ satādhikah // 「japaとdhyānaを欠いたものが実りないもの (agarbha) である。その反対が実りあるもの (sagarbha) である。agarbhaよりもgarbhaを備えたプラナーヤーマの方が百倍優れている (KA 15. 40)。」このような区分は広く知られるところであり、そのシャークタにおける例として他にŚT 25. 20-21abなどが挙げられよう。その他、Einoo [2002] p.33 ; Kane [1977] pp.1442-43も参照。

ある。それは、道具や供物の準備、浄化儀礼などの予備的な儀礼を行なった後に、女神を勧請して供養し、退出させるという流れからなっている¹¹⁾。そしてプラーナーヤーマは、浄化儀礼の一番最初に行なわれるのが普通である。実践者 (sādhaka) は、この儀礼によって自己の身体を浄化した後、ニャーサ儀礼によって身体各部や座などを聖化する¹²⁾。そうすることによって初めて女神の供養が可能となるのである¹³⁾。

TRはこの日常儀礼におけるプラーナーヤーマを次のように説いている。

ādhāre hr̥daye randhre vidyākhaṇḍatrayaṃ smaret /
lohitam tatprabhāvedhāl lohitam ca nijam vapuḥ // 32 //
prāṇāyāmaṃ vidhāyātha …… /

「ムーラダーラ・フリダヤ・ブラフマランドラ¹⁴⁾において、赤い、三

11) Gupta [1979] p.135では日常儀礼を浄化、障害からの防御、供養の三つに区分されている。この儀礼の概略について、井田 [2003] p.21 n.11参照。

12) TRではプラーナーヤーマの次に、三種のニャーサが行なわれるべきであると述べている。それは1) 手の浄化 (karaśuddhi)、2) 座のニャーサ (āsananyāsa)、3) 六肢体のニャーサ (śaḍaṅganyāsa) である。これらのニャーサで用いるマントラについてはTR 4. 6-11abにおいて、そして執行の手順についてはTR 5. 33-38において述べられている。

これらのニャーサが自分の身体などを指で触れつつマントラを唱えることでその部位を聖化するという儀礼である以上、1) 手の浄化はまず第一に行なわれなければならない。そして次の2) 座のニャーサは、a) 実践者、b) シュリーチャクラ、c) マントラ、d) 神格という四つの座を対象とする。このニャーサに関する記述はTRと同様のものがNSA 11. 27やSU 22に見出される。これに対して、上記の四つに供物を加えた五つの座が説かれる例 (KA 6. 16-20) や、水壺と水を加えた六つの座が説かれる例 (jñānadīpavimarśinī p.52) もまた見出される。さらに3) 六肢体とは、心臓・頭・髑・鎧・三つの目・武器という肢体の六つの部位である。これについてはSU 23も参照。

13) 神格の供養はその神格と同一化した者によってのみ行なわれるべきだとされる。 tato devyāḥ prasādena svātmānaṃ tatsamaṃ smaret/ nyāsatrayaṃ vidhāyātha devyātmā viharet sukhī// (TR 5. 5) このTRではプラーナーヤーマにもまたそうした自己と神格の一体化という意味合いが与えられている。注17参照。

14) この第三のチャクラに関しては、テキストによって見解が分かれている。TRではこのように頭頂部のブラフマランドラを述べるが、YHなどいくつかのテキストにおいて、それは眉間のアージュニヤーとして述べられる。

つの部分からなる〔根本〕ヴィディヤーを想起するべきである。それ（ヴィディヤー）の輝きの浸透ゆえに自分の身体を赤く〔想起しつつ〕、プラナーヤーマを行なって、そして（TR 5. 32-33a）」

ここで述べられているムーラーダーラなど三つのチャクラは、個人の身体内のスシュムナー管上に存在する、エネルギーの結節点である。ムーラーダーラチャクラは肛門の少し上、つまりスシュムナーの起点であり¹⁵⁾、フリダヤは文字通りに心臓、ブラフマランドラは頭頂部に位置している。そして根本ヴィディヤーとは、 *aiṃ klīm sauḥ* という三つの種子から構成されるマントラを指している¹⁶⁾。

実践者は日常儀礼のこのプロセスにおいて、前節で見たようなプーラカなどからなる呼吸法を行ないつつ、根本ヴィディヤーをジャパして、その三つの種子をそれぞれ自分の身体の三つのチャクラに位置するものとして思い浮かべる。これらの一連の実践が、シュリークラ派の日常儀礼におけるプラナーヤーマである。TRに従えば、この時ヴィディヤーは赤いものとして考えられ、それゆえにこのマントラが浸透した自分の身体もまた赤いものとしてイメージされる¹⁷⁾。

実はこうした三つの種子の瞑想を伴うプラナーヤーマは、既にNSAに見

15) 六つのチャクラの体系において、このムーラーダーラはヨーニを象徴するという。現に、このチャクラはしばしばそのように呼ばれている。それは例えば注25に示したNSA 4. 42などに見出される。Heilijgers-Seelen [1990] p.380参照。

16) *śuciḥ svena yutas tv ādya rasāvahnīsamānvitāḥ / prāṇo dvitīyāḥ svayuto vānahṛcchaktibhiḥ parāḥ // itīritā tryakṣarī syān nityāsau kulasundarī / yasyāḥ smaraṇamātreṇa sarvajñatvam prajāyate //* (TR 3. 51-52)
NSA 1. 100cd-102にも同種の記述あり。

17) この赤という色は、最高女神トリプラスンダリーの身体の色として想起される。
lohitām lalititām bāṇacāpapāśasṛṅṇīḥ karaiḥ / dadhānam kāmārajāmke yan tritām muditām smaret // (TR 4. 62)
そして根本ヴィディウヤーはこの最高女神の微細なる身体であると理解されるため、同様に赤いものとイメージされる。これは、儀礼の前に最高女神とマントラと自己

出される。

dhyātvā puratrayaṃ devi bījatrayasamanvitam /
sarvādyavidyayā devi karaśuddhiṃ tu kārayet // 126 //

「おお女神よ。三つの種子を備えた三つの都市（チャクラ）を瞑想して（ブラーナヤマを行なって）、おお女神よ。全ての中の最初のヴィディヤーで、彼は手の浄化を行なうべきである。（NṢA 1. 126）」

これらの儀礼で述べられる三つのチャクラは、一般的にはクンダリーニヨーガと関連する六つのチャクラの一部として言及されることが多い。しかしこの派のテキストを見る限り、ブラーナヤマや後述のクンダリーニヨーガなどの記述に限って、ほとんど常に三つのチャクラのみが言及されるのであって、六つのチャクラ全てが問題となることはまれである。そしてこの時、三つのチャクラはそれぞれ火・太陽・月という三つの輝きを持つものとして述べられる。

nityānityodite mūlādhāramadhye 'sti pāvakaḥ /
saveṣāṃ prāṇināṃ tadvad dhr̥daye ca prabhākaraḥ // 51 //
mūrdhani brahmarandhrādhaś candramāś ca vyavasthitaḥ /
tatrayātmakam eva syād ādyā nityā trikhaṇḍakam // 52 //

「ニティヤーというニティヤー女神 [の章(=16章)] において述べられたように、ムーラーダーラに火がある。そして一切の衆生のその心臓において太陽がある。そして額において、ブラフマランドラの下に

とが同一化されねばならないという考え方を表している。こうした観念は、女神の崇拜の前に自分の身体を赤く飾るべきであるという規定に典型的に示されている。
raktagandhāmbaraḥ sragvi raktabhūṣādibhūṣitaḥ/ prasannacetāḥ karpūravāsītāsyā varāṅgavān//
(TR 5. 19)

同様の例としてNṢA 1. 120-122, 1. 130-131abも参照。

月が位置している。それら三つからなるものが、まさに三つの部分からなる第一のニティヤー女神（＝トリプラスンダリー）である。（TR 30. 51-52）」

このように、シュリークラ派のプラーナーヤマの特徴は、身体を垂直的に三極構造として捉え、その瞑想を伴うという点である。しかしこうした身体の三極化と、それらの宇宙の三祭火（火・太陽・月）との対応性は、我々にこれとよく似たもう一つの対応関係を連想させる。それは三つの脈管イダー・ピンガラー・スシュムナーと、月・太陽・火との対応性である¹⁸⁾。この広く知られた観念がシュリークラ派のプラーナーヤマにおける三つのチャクラの底流にあると推測することは決して不自然ではないだろう。

2. クンダリニーヨーガ

以上見てきたように、この派の日常儀礼の中で行なわれるプラーナーヤマは三つのチャクラの瞑想を伴っている。しかしこの瞑想は、プラーナーヤマの場合にのみ言及されるものではない。NSAを初めとする同派の多くのテキストにおいて、この種の瞑想と結びついたクンダリニーヨーガが述べられているのである。

背骨に沿って走るスシュムナー管の上には、六つの主要なチャクラが存在すると考えられている。それらは下から順に、ムーラーダーラ（肛門から2指上）・スヴァーディシュターナ（男性性器）・マニプーラ（臍）・アナーハタ（心臓）・ヴィシュッディ（のど）・アージュニャー（眉間）と呼ばれる。さらにTRなど多くのテキストでは、頭頂部のブラフマランドラを加えた七つのチャクラ

18) 吸気と呼気を運ぶとされるイダーとピンガラーは、しばしば月と太陽に対応付けられる。そしてエリアーデに寄れば、タントリズムにおいては、この両者の合一による至福の獲得というシンボリズムがしばしば見出されるという。そしてこうしたシンボリズムは人間存在の宇宙化と、相反するものの合一による宇宙の超越という観念に基づいている。エリアーデ [1975] pp.58-66参照。

を説いている¹⁹⁾。そして、これら六つの中では基底部にあたるムーラーダーラにおいて、個人の生命エネルギーないしアートマンとして理解されるクンダリーニが、蛇の姿でとぐろを巻いて眠っている。このクンダリーニを、呼吸法や瞑想によって覚醒させ、スシュムナー管を通して上昇させるのがクンダリーニ・ヨーガと呼ばれる実践である²⁰⁾。

このクンダリーニはNṢAの4章において次のように説かれている。

yadollasati śṛṅgāṭapīṭhāt kuṭīlarūpiṇī // 12 //
 śivārkamaṇḍalam bhitvā drāvayantīndumaṇḍalam /
 tad udbhavāmṛtasyandaparamānandananditā // 13 //
 kulayoṣit kulam tyaktvā param puruṣam eti sā /
 nīrlakṣaṇam nirguṇam ca kularūpavivarjitam // 14 //
 tataḥ svacchandarūpā tu paribhramya jagat punaḥ /
 tena cāreṇa saṃtuṣṭā punar ekākinī satī // 15 //
 ramate svayam avyaktā tripurā vyaktim āgatā /

「曲がった姿をしたもの（クラクンダリーニ）が、[ムーラーダーラチャクラの中央の] 三角の場所から、輝き出て、シヴァ[の輪（ムーラーダーラ）]と、太陽の輪（フリダヤチャクラ）を貫通して、月の輪（アージュニャーチャクラ）に融ける、その時、創造の甘露が流れ、最高の喜びが喜ばれる。よい家柄の女性（クラクンダリーニ）は、家を捨てて、彼女は、特徴のない、無属性な、家庭や姿を捨てた最高の男（アクラクンダリーニ）のところに行く。そしてそれから、自らの望みどおりの姿を持った、満足した者は、再び世界をさまよい、その道を通して、再び一人になって、自分自身で喜ぶ。未顕現のトリプラー女神は顕現に至る。(NṢA 4. 12cd-16ab)」

19) randhre bhāle tathājñāyām gale hr̥di tathā nyaset/ nābhāv ādhārake pādadvaye mūlāgrakāvadhi// (TR 4. 21)

20) Kane [1972] pp.1061-62 ; Silburn [1988] 参照。

このように、クンドリニーヨーガにおいてもまた三つのチャクラが火・太陽・月という三つの輝きを持つものとして言及されている。自分の身体を三極化する瞑想を伴うという点において、NṢAのクンドリニーヨーガは、前節で述べたようなブラーナヤマと同じ特徴を持っている。さらに、ブラーナヤマにおける氣息 (prāṇa) とクンドリニーヨーガにおけるクンドリニーは、どちらも脈管を上下するある種のエネルギーとして、極めて似ている²¹⁾。しかしそうした類似性にも関わらず、これら二つの儀礼は、NṢAのような外的儀礼の中で全く異なった位置を占めている。そこでのブラーナヤマが自己の身体を浄化する役割を担うのに対して、クンドリニーヨーガは、それ自体が解脱などをもたらすものとして、成就法の文脈において述べられているのである²²⁾。

このことは、外的儀礼と内的儀礼という儀礼の二つの位相の違いに由来する。先の引用において、このクンドリニーヨーガは、クラとアクラという二体のクンドリニーを一体化させる実践として説明されていた。火のマンドラ (チャクラ) であるムーラダーラから出発したクラクンドリニーが、スシュムナー管の中を上昇し、太陽のマンドラであるフリダヤチャクラを通過して、一番上にある月のマンドラ、すなわちアージュニャーチャクラにおいて、もう一体のアクラクンドリニーと合一する。この合一によって、成就が獲得される。以上のような瞑想の実践は、シュリークラ派の神学理論の根幹をなす、最高原理 (トリプラスンドリー女神) の二つの側面であるシヴァとシャクティからの世界の展開論に基づいて理解されている。つまり、クラとアクラは、世界の動的側面であるシャクティと静的側面であるシヴァの、個人の身体レベルにおけるあら

21) mūlādhārasthavāhnyātmatejomadhye vyāvasthitā/ jīvaśaktiḥ kuṇḍalākhyā prāṇākāreṇa tena sā// 「kuṇḍalāと呼ばれるjīvaśaktiは、彼のprāṇaという形をとって、mūlādhāraにある火の性質を持つ輝きの中に位置している。(TR 30. 64)」

22) こうしたクンドリニーヨーガの果報として、一切知、シヴァとシャクティの合一としての最高のブラフマンの認識などが述べられている。

tadā viśvapratiṭiḥ syāt prāṇinām anyadā punaḥ/ niśāṇḍhakāre bhuvanasthitiṣv svātmanāḥ sthitiḥ // evaṃ tāṃ vetti yo dehe deśikādeśadarsitām / sa vetti brahma paramaṃ māṃ tvām api ca sādhaḥ // (TR 30. 68-69)

われに他ならない。それゆえに、両者の合一とは、世界の原初的状態の再現、すなわち最高女神トリプラスダリーへの帰滅を意味することになる。

このように、クラとアクラとの不二元的なクन्दリニーヨーガは、シュリークラ派の神学概念と密接に結びついている。そしてこの儀礼は、NSAという外的儀礼を扱うテキストの中でさえも、解脱論的な世界観を色濃く反映しており、先のプラーナーヤーマのような純然たる外的儀礼とはいささか異なっている。現にYHなどの理論的著作においてもクラとアクラのクन्दリニーは述べられており²³⁾、この儀礼が内的儀礼としての性格を強く持つことが理解されよう。それはこのクन्दリニーヨーガが外的所作を伴わない、全くの瞑想儀礼であるということにも関係するのだろう。

3. クन्दリニーヨーガとしてのプラーナーヤーマ

多くの儀礼的文脈において、プラーナーヤーマとクन्दリニーヨーガは異なった儀礼要素として扱われる。これに対してYHは、プラーナーヤーマをある種のクन्दリニーヨーガとして再解釈している。

mūlakunḍalinīrūpe madhyame ca tataḥ punaḥ /
 sṛṣṭyunmukhe ca viśvasya sthitirūpe maheśvari // 172 //
 kevalaṃ nādarūpeṇa uttarottarayojanam /
 śabalākārake devi tṛtīye dvādaśī kalā // 173 //

「創造のために顔を上げたムーラクन्दリニーという姿をしたもの（ムーラーダーラにいる火のクन्दリニー）、そして万物の維持という性質をした中央のもの（フリダヤにいる太陽のクन्दリニー）は、偉大な主宰女神よ、音のしない響きという姿で、それぞれ後のものに結

23) YHでは、後述の三元的なクन्दリニーヨーガのみならず、こうした不二元論的クन्दリニーヨーガに関する記述も見出される。

madhyabinduvisargāntaḥ samāsthānamaye pare/ kuṭilārūpake tasyāḥ pratirūpe viyatkale// (YH 2. 21)

びつく。交じり合った姿をした第三のもの（アージュニャーにいる月のクンダリニー）において、[マントラの響きの] 12番目の部分（unmani）が、[発声されるべきである]。（YH 3. 172-173）」

興味深いことに、YHのこの箇所述べられるのは、クラ・アクラではなくて火・太陽・月の三体のクンダリニーである。ここでは第一の火のクンダリニーは一番下のムーラーダーラチャクラに、第二の太陽のクンダリニーはフリダヤチャクラに、そして第三の月のクンダリニーはアージュニャーチャクラにそれぞれ位置するとされている。そしてこれら三体のクンダリニーは、ジャパされる三つの種子マントラに対応している。これらのマントラがジャパされるのと同時に、各々のクンダリニーが順番に上昇して次のクンダリニーと結びつく。このような三体のクンダリニーの観想を伴うクンダリニーヨーガは、クラクンダリニーがムーラーダーラから頭頂まで上昇してアクラクンダリニーと合一するという先のクンダリニーヨーガとは決定的に異なっている。この三体のクンダリニーは、個人原理というよりはむしろ、三つの種子マントラと等価なのである。そのことは例えば次のような記述にも現れている。

śvāsadvayanirodhena kuṇḍalītrayamelanāt /
yaj jīvaśivayor aikyaṃ tenāsāv āntaro baliḥ //

「二つの息（プラーナ・アパーナ）の制御によって三体のクンダリニーが交じわることで、個我とシヴァとが一つになったその時、それによってこの内的なバリがある。（YHD 3. 198）」

これはYHの注釈家AmṛtānandaがYHのバリ供養に対して示した説明である²⁴⁾。ここでは、先に見たようなプラーナ・ヤーマと三体のクンダリニーの実践に、

24) これはAmṛtānandaの自著Tattvavimarśinīからの引用である。Padoux [1994] p.398参照。

さらにバリ儀礼を重ね合わせて説いている。バリ儀礼に関してここで触れる余裕はないが、本稿に関係する事柄に限れば、少なくとも次の点が確認されれば十分である。というのは、この実践が、a) プラーナーヤーマを行なって、b) 三体のクンドリニーを交わらせて、c) 個我とシヴァが一体となる、という三つのプロセスからなるということである。三つの種子と等価である三体のクンドリニーは、ここでも上昇下降する氣息とは明らかに別個のものとして理解されているのである。そしてさらにシヴァとシャクティの合一は、先の不二元的クンドリニーヨーガにおけるクラとアクラの合一に対応するプロセスである。

このようにYHにおいてプラーナーヤーマはクンドリニーヨーガと結びつけられる。そこではクンドリニーは三体として解釈され、もはやクラ・アクラの合一というクンドリニーヨーガの基本構造は残っていない。しかし、だからといって不二元論的な同派の理論的枠組みそのものが放棄されてしまった訳ではない。クラ・アクラの一体化として儀礼の中に表現されていた同派の解脱論は、ここではそうした実践の結果生じる、個我とシヴァとの合一として、より直接的に述べられることになる。

4. ま と め

以上見てきたように、儀礼の内化を押し進めるYHにおいて、外的儀礼としてのプラーナーヤーマはクンドリニーヨーガと統合され、内的儀礼の体系の中に位置付けられる²⁵⁾。しかしその際に、クラ・アクラのクンドリニーは、身体を三極構造として把握するプラーナーヤーマに適合するように火などの三体のクンドリニーへと変更されている。これは様々な外的儀礼が内化されて一つの儀礼体系へと統合されるプロセスの典型的な例だと言えるだろう。本来、身体の浄化を目的とする外的儀礼としてのプラーナーヤーマは、シヴァ・シャク

25) 外的儀礼がクンドリニーヨーガとが統合される例として興味深いものの一つに、TRのホーム儀礼が挙げられるだろう。そこでは、解脱論的なクンドリニーヨーガを頂点として、その下位に様々な現世利益的ホーム儀礼を位置付けるというヒエラルキカルなシステムが形成されている。井田 [2003] pp.16-17参照。

ティの合一による世界の帰滅をモチーフとする内的儀礼として複合的に再構成された時、外的な意味を一旦失うことになる。しかしこうした変容のプロセスは一方的なものではありえない。理論的な立場に基づいて示される内的儀礼は、実際に行なわれる外的儀礼の文脈に干渉され、しばしば変更を迫られるのである。まさにそれこそは、先に見たようなクンドリニーヨーガの三極化である。

不二元的クンドリニーヨーガが解脱に向かうプロセスであるのに対して、三極的クンドリニーヨーガは、〈クンドリニー＝マントラ＝力〉を自己の身体へ遍満させる実践として理解できる。こうした力の遍満は、まさにそれによって自己の身体を聖化するというこのプラーナヤーマ儀礼の文脈から要請されたものである。それゆえこの三体のクンドリニーの観想は、もはやシャクティとシヴァの合一そのものとして理解されることはなく、浄化儀礼として手段化される。これは、前節のバリ供養に関する記述にも見た通りである。

以上のような相互作用の結果として形成されたこの派のプラーナヤーマは、外的儀礼としては身体の浄化を、そして内的儀礼としては解脱をもたらすという具合に、相反する二重の文脈を抱え込んだ儀礼要素として、TRにおいて一応の決着を見る。この儀礼の二つの位相における対極を示すのがNŞAとYHであるのに対して、これらのテキストの後を受けて成立したTRは、両位相の間で、より中間的な位置を選択することになるからである。TRにおけるこうした儀礼観は、儀礼の果報としてある箇所において解脱を説きつつも他の箇所では現世利益を説くというような、一見矛盾する記述としても我々の前に現れている。

ここでもう一度、本稿第1節に引用したTRとNŞAのプラーナヤーマを比べてみるなら、両者の間に小さな、しかし決定的な相違が見出されるだろう。と言うのは、NŞAが三つの種子マントラと三つのチャクラとの対応を述べるに留まっているのに対して、TRではその三つのマントラがお互いに交わり、身体に浸透するものとして説かれているのである。この記述は、TRがYHのように三つのマントラをクンドリニーと重ねあわせ、それが上昇しつつ体に満ちていくというモチーフを採用していることを示している。

今回詳しく触れることはできなかったが、NŚAに示されるクन्दリニーヨーガには多数のヴァリエントが存在し、その中には不二元的なモチーフを持たないものも存在している²⁶⁾。それならばクラ・アクラのクन्दリニーヨーガがYHのような儀礼の内化のプロセスの中で三極化したと理解する代わりに、それ以外に存在した三極的なクन्दリニーの観想がここで採用されたと考えることも可能かもしれない。ただしその場合にも、クन्दリニーの上昇とその終局における解脱というモチーフは、まさにクラ・アクラのクन्दリニーヨーガからの影響を抜きには考えられない。その影響が直接的であるか間接的であるに関わらず、この不二元論的なクन्दリニーヨーガは、さまざまな外的儀礼を内的儀礼として再解釈する際に重要な概念として用いられているのである。

参考文献

Devībhāgabhatapurāṇa, Nag Publishers, Delhi, 1986.

JA : *Īānārṇavatāntra*, Ānandāshram Sanskrit Series No.69, Poona, 1952.

Īānadīpavimarśinī of Śrī Vidyānanda Nātha, Dvivedī, V. V., Yogatantragranthamālā vol.26, Varanasi, 1996.

KA : *kulārṇavatāntra*, Tārānātha Vidyāratna, Motiral Banarsidass Publishers, Delhi, 1965.

NŚA : *Nityaśoḍaśikārṇava with Two Commentaries Rjuvimarśinī by Śivānanda and Artharatnāvalī by Vidyānanda* (with Appendix : *Tripurasundarīdaṇḍaka of Dīpikanāthasiddha and Subhagodaya, Saubhāgyahṛdayastotra and Subhagodayavāsana*

26) 例えば、身体内の三つのチャクラにおいてクन्दリニーを瞑想する実践がNŚAに述べられている。

calajjalendusadṛṣi bālārkakiraṇārūṇa// cintitā yoṣitām yonau saṃmohayati tatksaṇāt/ saiva sindūravarṇābhā hṛdaye cintitā satī// saṃmohonmādanākṛṣṭacittākaraṣakarī smṛtā/ niyojitā athavā mūrdhni varṣantī raktabindavaḥ// dhāraṇāsamprayogeṇa karoti vivaśaṃ jagat/ (NŚA 4.41cd-44ab) .

この実践はYHの三極のクन्दリニーヨーガの原型として理解できるかもしれない。ただしここでカーマカラーとして言及されるクन्दリニーの瞑想は、その結果として魅惑や調伏をもたらす、完全に現世利益的なものである。

- of Śivānanda, and *Saubhāgyasudhodaya* and *Cidvilāsastava* of Amṛtānanda), V. V. Dviveda, *Yogatantragranthamālā* vol.1, Varanasi, 1968; *The Vāmakeśvarī matam with the Commentary of Rājanaka Jayaratha*, Kashmir Series of Texts and Studies 66, Śrinagar, 1954.
- ŚT : *Śāradātilakatantra*, A. Avalon, Motiral Banarsidass Publishers, Delhi, 1982.
- SU : *Subhagodaya* : cf. NṢA.
- TR : *Tantrarājatantra*, ed. L. Shastri, Motiral Banarsidass Publishers, Delhi, 1981.
- Yājñavalkyasmṛti, Nag Publishers, 1985.
- YH : *Yoginīhṛdayam*, ed. V. Dviveda, Motiral Banarsidass Publishers, 1988.
- Bühnemann, G. [1988] *Pūjā, A Study of Smārta Ritual*, Publications of the De Nobili Research Library, vol.15, University of Vienne, Vienna.
- Brunner, H. [1992] “Jñāna and Kriyā : Relation between Theory and Practice in the Śaivāgamas”, *Ritual and Speculation in Early Tantrism*, pp.1-59, State University of New York Press.
- Eino, S. [2002] “Two Ritual Topics in the Yājñavalkyasmṛti”, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, vol.14, Kyoto.
- エリアーデ, M [1975] 『エリアーデ著作集第10巻 ヨーガ 2』, 立川武蔵訳, せりか書房。
- Goudriaan, T., Gupta, S. [1981] *Hindu Tantric and Śākta Literature*, A History of Indian Literature, V.2, Fasc.2 Wiesbaden.
- Gupta, S., Hoens, D., Goudriaan, T. [1979] *Hindutantrism*, Handbuch der Orientalistik, 2. Abt. 4, Band 2, Abschnitt, Leiden.
- Heilijgers-Seelen, D. [1990] “The Doctrine of the Ṣaṭcakra”, *The Sanskrit Tradition and Tantrism*, Panels of the VIIth World Sanskrit Conference, ed. by Teun Goudriaan, Leiden.
- 井田克征 [2003] 『『タントララージャ』におけるホーマ儀礼』『社会環境研究』 8, pp.13-33. 金沢大学大学院社会環境科学研究科。
- Kane, P. V. [1977] *History of Dharmaśāstra*, vol.4, Poona.

Padoux, A. [1994] *Le cœur de la yoginī: Yoginīhṛdaya avec le commentaire Dīpikā d'Amṛtānanda*, Collège de France Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, fasc. 63, Paris.

Silburn, L. [1988] *Kuṇḍalinī, The Energy of the Depths*, State University of New York Press.

〈キーワード〉 タントリズム, シュリークラ派, prāṇāyāma, Kuṇḍalinī-Yoga, Tantrarājatantra

Prāṇāyāma and Kuṇḍalinīyoga in the Śrīkula Sect

katuyuki IDA

There are two perspectives in the theory of Tantric ritual: *bahiryāga* and *antaryāga*. The former gives an account of ritual from a practical, descriptive standpoint, and often shows inclinations toward *bhukti*. The latter approaches ritual from a normative point of view and is mainly a soteriology aimed at *mukti*. Since there have been interactions between these two aspects of tantric ritual, I will discuss the *prāṇāyāma* ritual in the *śrīkula* cult in *śākta* as one example of such an interaction.

First, TR and nṣa treated *prāṇāyāma* as a *bahiryāga*, the purpose of which was the purification of one's own body. The main characteristic of this *prāṇāyāma* is that it was accompanied by meditation on the three cakras and the three *bīja* mantras.

YH subsequently combined this *prāṇāyāma* with *kuṇḍalinīyoga*, which had been associated with their advaitic world view in the NSA, for the purpose of systematizing those rituals in a normative perspective. In doing so, YH modified the dualistic (*kula*, *akula*) *kuṇḍalinīyoga* into a triadic (*agni*, *sūrya*, *soma*) yoga in accordance with the three cakras. This modification can be seen as one of the effects of the interaction between the two different approaches to Tantric ritual.